

大学病院の看護師に倫理的実践が求められる臨床場面に関する実態調査 ～臨床場面の最ももやもやした事例の分析～

近畿中部地区看護部長会議 C 委員会

越村利恵（大阪大学医学部附属病院）
松浦正子（日本赤十字豊田看護大学）
鈴木美恵子（浜松医科大学医学部附属病院）
江藤由美（三重大学医学部附属病院）
市村尚子（日本看護協会神戸研修センター）
小藤幹恵（石川県看護協会）
渡邊真紀（金沢大学附属病院）
井川順子（京都大学医学部附属病院）

西村路子（滋賀医科大学医学部附属病院）
江守直美（福井県看護協会）
秋山智弥（岩手医科大学）
廣瀬泰子（岐阜大学医学部附属病院）
米道智子（富山県看護協会）
池美保（大阪大学歯学部附属病院）
三日市麻紀子（富山大学附属病院）

【はじめに】

大学病院では先進医療に伴う臨床倫理的な諸問題への対応が求められており、大学病院の看護師が体験する倫理的問題の現状を把握したいと考えた。

【目的】

看護師が直面する倫理的問題の体験後に生じるわだかまりの感情をもやもや感と定義づけ、大学病院に勤務する看護師が遭遇する倫理的問題体験後の“もやもや感”の特徴を明らかにする

【方法】

中部地区国立大学病院に勤務する看護師 690 名を対象に質問紙調査を行い、過去 1 年間に体験した「最も“もやもや感”が残った出来事」について自由記載を依頼した。記載内容より事例を抽出し、含まれる看護実践における倫理的問題を Fry らの EIS 日本語版 32 場面と照合した。さらに Fry の提唱する「倫理的分析と意思決定モデル」を参考に「価値の対立」が生じた関係者について分析した。なお、これらの分析には看護師経験 30 年以上の看護管理者 12 名で行った。

【倫理的配慮】

本調査は滋賀医科大学倫理委員会の承認を受け実施した(承認番号 K29-1290)。質問紙は無記名とし研究同意欄を設け回答は個別郵送で回収した。

【結果】

対象者 690 名中「最も“もやもや感”が残った出来事」の記載は 148 名(21.4%)で、抽出した事例は 161 例であった。各事例の内容を EIS 日本語版 32 場面に照合すると 1 事例に最高 7 場面含まれ、すべての事例が 32 場面と照合できた。倫理的場面は、多い順に「患者の権利と尊厳」55 事例(34.2%)、「患者の QOL の考慮」40 事例(24.8%)、「非倫理的行動等をとる同僚と働く」27 事例(16.8%)、「治療に関するインフォームドコンセント」26 事例(16.1%)、「看護師-医師関係の対立」24 事例(14.9%)であった。一方「価値の対立」が生じた関係者は、多い順に「看護師自身」「医師」「患者家族」「他の看護師」「他の医療職種」が抽出され、20 事例において複数の関係者の価値の対立が認められた。

【考察】

倫理的場面は、EIS 日本語版 32 項目とすべて照合でき、大学病院に特化した倫理的場面は認めなかった。看護師は患者の権利や尊厳、QOL の考慮等看護師としての職業倫理に基づく行動ができない自責に悩み、それらが他者より看護師自身の価値の対立として表れていると考えられた。

【結論】

大学病院に特化した倫理的問題の場面はなく、価値の対立は看護師自身の中で最も多く生じていた。